

## 九州における水田高度利用の現況と将来方向

藤 井 定 吉  
(九州農業試験場)

FUJII, S.

Present and Future Situation of Multiple Cropping on Paddy Field in Kyushu.

わが国における食糧自給率向上のためには、耕地利用の高度化が必要であるが、近年の耕地利用率の推移をみると、減少傾向が著しい。冬期耕地利用率では、都府県計で畑が昭和40年78%、48年68%に対し、水田はそれぞれ23%、9%であり、水田での利用率の低下が著しい。

水田に対しては、国や地方公共団体・農家によって、多大な投資がなされているのに、大部分の水田が年間4～5ヵ月しか利用されていないことは、土地資源の有効利用の観点からも問題であろう。

九州における水田高度利用については、このあと作目別や基盤整備・経営といった専門の立場から詳細な話題提供があるので、ここでは全般的な趨勢を述べることにし、紙数の関係で水田冬期利用（水田裏作）を中心としたい。

## (1) 水田冬期利用の現状

九州における水田冬期利用率は近年減少をつづけ、昭和40年の50%に対し48年は25%と半減したが、49年は若干増加して29%となっており、都府県計の9%に比べて著しく高い点は従来と変りない（第1表）。これを県別にみると、佐賀・宮崎・鹿児島県の利用率が高いが、面積では水田の多い福岡・熊本が多くなっている。

水田冬期利用面積中麦作面積の占める割合（構成比）は、第1表のように、九州全体で37%であり、県別では佐賀が70%以上、福岡・大分が50%前後、熊本・長崎が30%前後で、南九州2県はきわめて低い。面積では福岡・佐賀・熊本の北九州3県が多く、九州の水田麦作面積の80%を占める。

これに対して飼料作物の作付面積は宮崎・鹿児島県の南九州2県が北九州各県に比べて著しく多く、熊本が両者の中間であり、構成比も南九州2県が高く、麦作の場合と比べてきわめて対照的である。

麦・飼料作物以外の作付面積は鹿児島・熊本・福岡が多く構成比も高い。このうち、鹿児島は緑肥れんげ、熊本はいぐさ・たばこ、福岡はやさい・いぐさといった地方的特徴のある作物の割合が高い。

第1表 水田冬期利用の現況（昭49）

県別	冬期水田利用		麦類		飼料作物		その他	
	面積	率	面積	構成比	面積	構成比	面積	構成比
都府県	千ha 254.4	% 8.7	76.0	30	81.6	32	96.8	38
九州	120.6	28.8	44.1	37	36.1	30	40.4	33
福岡	24.5	26.9	13.4	55	2.6	11	8.5	34
佐賀	18.2	34.1	13.2	73	2.3	13	2.7	14
長崎	7.0	21.8	1.9	27	2.8	40	2.3	33
熊本	24.2	27.9	8.0	33	5.7	24	10.5	43
大分	8.1	17.1	3.8	47	2.8	34	1.6	19
宮崎	16.1	35.1	2.7	17	10.2	67	3.2	16
鹿児島	22.5	44.1	1.1	5	9.7	43	11.7	52

注) 構成比は水田冬期利用面積中に占める割合

## (2) 水田冬期利用の将来見通し

九州各県におけるおよそ5年後の水田冬期利用の見通しを集計すると第2表のとおりである。利用面積の昭和49年に対するのびは、九州全体で43%であり、佐賀・長

第2表 およそ5年後の冬期水田利用見通し

県別	冬期水田利用		麦類		飼料作物		その他	
	面積	比	面積	比	面積	比	面積	比
九州	千ha 172.8	% 143	83.1	188	47.5	132	42.2	104
福岡	33.6	137	27.5	204	3.0	115	3.1	36
佐賀	29.5	162	23.0	174	3.0	130	3.5	130
長崎	11.5	160	4.5	237	5.5	196	1.5	65
熊本	30.3	125	14.0	175	6.0	105	10.3	98
大分	9.8	121	9.0	237	0.5	18	0.3	19
宮崎	25.2	156	3.6	133	15.6	153	6.0	187
鹿児島	32.9	146	1.5	136	13.9	143	17.5	150

注) 1. 農林省農産課：「今後の水田農業に関する検討会の概要」昭和50年6月より引用  
2. 鹿児島県は昭和52年の普及見込み  
3. 比は対49年面積比率

崎の60%、宮崎・鹿児島島の50%が著しい。作物別にみると、麦類は南九州2県を除き各県とも著しい増加が見込まれ、飼料作物は南九州2県と長崎が増加の見通しである。その他の作物は南九州2県を除き減少する県が多い。

このように、近い将来における水田冬期利用の方向は、北九州の麦作、南九州の飼料作といった現状のパターンと変りはないが、その分極化が一層顕著になるものと推察される。

### (3) 水田冬作の地帯別特徴

以上のような水田冬期利用の県別の動きをふまえて、水田地帯別に水稲作と水田冬作物との関連性について概観してみよう。

有明海をかこむ肥沃な佐賀・筑後・熊本各平野は、北九州平坦肥沃地帯といわれる水稲多収穫地帯であり、水稲中晩生種の作期に支障のない麦作に重点がおかれている。この地帯は伝統的な麦作地帯であり、今後も麦作中心に麦作がのびる可能性はあるが、機械化を前提とした水田基盤整備や集団的生産組織化の促進とともに、湿害防止の総合的対策が麦作の安定化のために必要であろう。この地帯の干拓地等にはいぐさの作付が多いが、多様な諸作業の機械化が進んでも、需要に限界があって、今後著しい作付増加は期待できないであろう。いぐさの跡作水稲は晩期栽培となって普通期植より低収であるが、中苗機械植や紙筒苗の利用による省力化と収量向上がはかられている。

長崎・福岡北部・大分にまたがる地力中位の北九州沿岸平野の水稲も中晩生種の普通期植が中心であるが、収量は中位で、麦作の作付率は低い。今後飼料作(長崎)、麦作(大分・長崎)がかなりのびるとしても、地形その他の点で、肥沃地帯ほどの麦作率は期待できないであろう。

九州山地をめぐる中山間地帯は一般に地力が低く、水稲は低収であるが、肉牛・乳牛の飼育に対応した飼料作

物・飼料麦の水田裏作や転換畑が多い。今後この地帯における畜産の進展にともない、これらの作付増加の可能性が高いが、畜産経営と水稲および水田飼料生産をどのように調和させてゆくかが問題であろう。中山間から山ぞいにかけてたばこ作があり、跡作水稲晩期栽培はいぐさ跡より作期がおくれて低収となるが、水稲移植期を早めるため、たばこの早どりから品質低下をまねく傾向がでており、作付体系の検討が必要であろう。

宮崎・鹿児島島の沿岸平野を中心とした南九州平地地帯も地力が低く、水稲は普通期植のほか早期栽培が約1/3あり、いずれも収量水準は低い。普通期の跡は飼料作物をはじめ緑肥れんげ・やさい・麦類などが作られ、現状でも裏作率は高く、今後も飼料作を中心に裏作増が見込まれるが、早期跡はきわめて作付が少ない点の問題である(第3表)。今後水田の地力増強とともに、早期跡地利用のための作付体系の一層の検討がのぞまれる。

第3表 水稲作期別裏作面積(鹿児島)

	昭 49		昭 52 (見通し)	
	早期跡	普通期跡	早期跡	普通期跡
麦 類	— <sup>ha</sup>	1,148 <sup>ha</sup>	— <sup>ha</sup>	1,520 <sup>ha</sup>
飼 料 作 物	1,344	8,405	3,110	10,790
施設やさい	28	276	40	425
露地早出し やさい	353	957	500	1,300
緑肥れんげ	—	9,003	—	11,880
そ の 他	—	1,120	—	3,370
計	1,725	20,909	3,650	29,285
水 稲	9,430	36,600	(9,430)	(36,600)
裏 作 率 (除れんげ)	18.3%	57.1% (32.5)	38.7%	80.0% (47.6)

注) 鹿児島農試調査資料による。